
地上の織姫と彦星

ukaze

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地上の織姫と彦星

【Nコード】

N4367M

【作者名】

u k a z e

【あらすじ】

七夕の夜、一人の少女の話

今日は七夕だ。

空を見上げる予定は今のところ、ない。

天気も空を見るには都合が悪いらしい。

そんなことを部室で考えている。部室には私以外に誰もいない。部員は私だけではないので、私しか部室に到達していないだけのことなんだけど。今日も早く帰ろうかなと思う。誰か部室の来るとしても帰りづらい。

外では運動部の掛け声、同じ校舎内では、合唱部や吹奏楽部の透き通った音色が聞こえてくる。それに比べて私は何をしているんだろう。きっと私は何かをしようとして手遅れになるタイプだと思う。カバンに荷物をまとめて部室を出ようとする。でも、それは私の行動を見計らったとしか思えない同級生の入室で妨げられる。

「何、おまえまた先帰るの？」

ああ、ここで帰らなかつたら今日は部活動参加だなあ。

「帰るよ。またね」

あまり会話するといけない。反論できなくなれば参加は決まったようなものだ。

「ちよっ、待てよおまえ先輩いつも困ってんだぞ。少しはそういうことも考える」

「考えてるよ。考えた上での行動。じゃ私行くから」

セリフからして私は嫌なやつだな。こんなだから多分、友達いないんだと思う。近づいてドアの前に立ってると邪魔だよオーラを出して退いてもらう。退室してドアを閉める。そして駆け出す。玄関まで。まるで何かから逃げるように。

家に着いたのは7時過ぎで夕飯は既に用意されていた。この時季

になると7時過ぎてもそこそこ明るい。夕飯とお風呂を済ませて8時半ごろには自室にこもる。食事中に見た天気予報では夜にかけて少しずつ晴れていくようだ。星が見られるかどうかは怪しいところらしい。

窓から顔を出し外を見上げてみる。エアコンの効いた自室とは少し違った冷涼感と少し雲の間に見え隠れする星が夏の到来を感じさせた。星やつぱり見てるじゃん、と自分に突っ込む。見上げても夏の大三角は雲に隠されているのか、自分の見上げるほうには無いのが見つけることはできない。もう、寝ようかなと女子高生にしては早い就寝を考える。窓を閉め、外の世界をシャットアウトする。カーテンも閉め、就寝準備とする。

電気を豆電球にまで消して布団にもぐる。おやすみとひとりつぶやき目を閉じた。

電話が掛かってきたと気がついたのは、偶然以外の何ものでもないだろう。いつもなら気がつかずに寝続けている。就寝時間の問題かな？寝ぼけた目でケータイを机からベッドに持ち込み表示を見ずに電話に出た。

「もしもし、誰ですかこんな時間に」

不満げに答える。結構眠いので語尾に行くにつれて発言がとけていくようなしゃべり方になってしまっている。

『何、寝てたの？ハハツ、今日はずいぶん早いね』

通話相手が誰かは声で判断した。途端に全身に緊張が走る。女子高生は一人や二人気になる子がいるのです。冷たいケータイを握っているはずの手が少し汗ばみ意識しないとケータイを落としそうだった。

「今日は眠たかったんだ。で、どうしたの？」

平静を装って返す。動揺を隠せたかどうかかわからないけど、なるべく自然に。落ち着けばできると心の中で念じながら、相手の返答を待つ。

『無理ならいいんだけどね。今から星、見に行かない？』

「二人でですかっ!？」

のわっ！ 反射的に訊いてしまった。すごい、眠気なんていつの間にやら消えている。どうも、こうも、平常心を保てない。恋愛とはこういうものですか。

対して相手はこちらの惨事を知るよしもなく通常通りのペースで返してくる。

『二人がいいならそれでもいいけど、一応何人が誘ってみる予定』

二人でもいいんだ！ それなら二人がいいです、といたいところだけれど言ってみようかな。やらずに後悔するよりもやって後悔したほうがましかな？ それで傷をつくることになるかもしれない。それでも、今日を逃せば次は無いだろう。私は何かをしようとすれば手遅れになるだろうから。

「えと、あの……私以外にもう誰か誘ってる？」

うう、私の意気地なし。確かめなきゃならないことだけど、これじゃないでしょ。

『ううん、君が一番最初だよ。あいうえお順で一番最初でしょ』

なるほど、あいうえお順か。一番最初って聞いた時、思わず顔がニコニコしちゃったけど他意はないんだね。少しがっかり。しかし、ここからだ。二人でどうですかって聞いてみるんだ。ちよつと、深呼吸。すってゝ、はいてゝ。

「あの……その、さっき二人でもいいって言ったよ、ね？」

緊張の末、声は震えていたし、しゃべり方もぎこちない。でも、切り出せた。よし。

『ん？ そうだけど、どしたの？ こんな僕との二人がいいの？』

そんなあなたとの二人がいいんです、なんていえないけど。

「う、うん、ダメ……かな？」

言ったあああああゝ！ うう、すごい緊張する。心臓の鼓動が大げさに聞こえる。エアコンが効いているはずなのに体が熱い。顔も火照り、ケータイをもっていないほうの手で頬をなでる。汗が流

れているような感覚と急激に冷えていくような感覚。いつの間にかベッドの前で立ち上がっていた。

『いや、いいんだけど。何故に僕と二人がいいの？ 僕っていいとこないでしょ』

『いいの？ やッ……』

また、反射的に言葉が！ やった、と言いつつ口をつぐむ。危ない危ない。やったあゝ今度は心中で存分に叫ぶ。少し落ち着いてきたけれど、心臓の鼓動は徐々に早くなってきた。

『？ まあ、いいや君と二人なら僕も嬉しいよ』

うわあ、そんなこと言われると今すぐ死んでもいいかもって思える。私に明日はあるのか！？ きっと今、私は満面の笑みを浮かべていることだろう。

『いつから行きますか？』

そう言つて、カーテンをめくり空を見た。その時、一番驚いたのは天気予報に嘘を吐かれたことだった。私の心と反比例するように外は雨。小雨レベルではなかった。水溜りレベル。雲は空を覆い隠していた。「うそお……」と言葉をもらす。

『どうしたの？』

今のが聞こえたらしい。というかあつちは気づいていないのか、天気に。どうしよう。私の心が次第に曇っていくのを感じた。

『外、雨降ってる。どうする？』

少し間をおいて外を確認したんだと思われる声が『あつ、ホントだ。晴れるって言ってたのにな』と聞こえ、『ゴメン。誘つていて天気も確認しなくて。ホントゴメン』と返してきた。

私は「全然いいよ。誘ってくれてありがとう」と返すのが精一杯だった。

『ホント悪いね。ゴメン時間とらせて。もういいよ切っちゃって』
そう簡単に切りたくない。こんな機会滅多に無いんだから。次はあるのかな、そう考えるともう手遅れになりそうな気がして、自分の心が声に出て電話の向こうの相手に伝わっていた。

今年も、夏の大三角を見ることは無かった。彦星と織姫は私の空ではつながらなかった。でも、地上でつながった、星と星の間なんて比較にならないくらい近い電話越しに。手遅れになる前に今度はうまくできたみたいだ。

あれから、部活にそこそこ真面目に出るようになった。帰り道、彼と一緒に帰るためだ。

彼は「来年こそ、二人で星、見ような」って言っていた。私は「うん」って一言だけで返した。

来年の7月7日は晴れますようにと願いをこめて。

（後書き）

目を通してくださってありがとうございます。

最後らへんがぐちゃぐちゃになるのが僕の弱点です。

あと、僕はこれくらいの文章量が書きやすいようです。 3000字くらい。

これからもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4367m/>

地上の織姫と彦星

2010年10月8日14時25分発行